

派遣先：ヒルデスハイム大学（ドイツ）

派遣期間：2012年11月20日から2012年11月26日

研究テーマ：ラトヴィア語の動詞接頭辞付加

[派遣の概要]

ITP-EUROPA 国際セミナーで研究発表を行った。派遣者は短期派遣 EUROPA プログラムでラトヴィア大学に派遣され（2011年10月から2012年1月）、2012年9月に博士論文を提出した。今年度は博士論文の執筆と完成に追われていたため、ゼミなどの発表を除くと、学会発表は2011年11月以来1年ぶりとなった。

今回発表をしたのは博士論文の一部で、新聞データベースをどのようにラトヴィア語の接頭辞研究に活用できるのかという内容であった。言語学に限らず他の分野の研究者もセミナーに参加することを考え、詳しい理論よりも紹介的な内容に留めた。発表内容は大きく分けて、①新聞データベースを使った借用語の動詞への接頭辞付加の数量的な傾向、②新聞のテキストにおける接頭辞動詞の比較である。②では、規範主義の観点から好ましくないとされる接頭辞がテキストの校閲により削除されることを複数の新聞記事で比較したほか、同じ出来事に対して、完了・不完了といったアスペクト的意味や、「少し…する」というアスペクト的意味を元にした、出来事に対する話者の主観的態度が様々な接頭辞により示されていることを述べた。

質疑応答では、4人の方から質問やコメントをいただくことができた。博士論文の中では少し触れていたが、本発表では述べなかった2点（規範主義で批判される接頭辞が話された言葉でより使用されること、若者の方がよく使用するという傾向）を応答の形で述べた。書かれた言葉と話された言葉、また話者の年代別の接頭辞動詞の使用頻度の比較という、今後本テーマで研究を続けていく上で必要な見地を改めて確認した。

派遣者は英語による論文は書いたことがあるものの、質疑応答も含め英語による発表は今回が初めてで不安であったが、無事に乗り越えることができた。今後は、英語が主な作業言語である学会に参加をする可能性もあるため、ラトヴィア語やロシア語の研究の傍らで疎かにしていた英語の学術表現を意識的に勉強していく必要があると感じた。

今回は異なる分野のセッションがあり、言語学だけでなく様々な分野の研究者が集まった。自分が他分野に疎いこと、また発表言語を解さないことによる消化不良もあったが、同世代の研究者が英語以外の各言語で発表をしている姿を目にできたほか、互いの研究の面白さや苦労話をするのができ、非常に刺激を受けた。

今後は、提出した博士論文を今一度見直し、博士論文の審査に向けて準備を行う。それと並行して、今後の研究課題であるラトヴィア語とロシア語の対照研究に向けた構想を練らなければいけない。